

ソードアートオンライン  
～紫の少年と紫の  
少女～

フラっぴー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人生が退屈だった少年「風薙瞬」はあるものに興味を持つた。

それはVRMMORPG「ソードアートオンライン」

少年はその世界でさまざまな人たちと出会い退屈だった人生がすこしづつ変わつて  
いくのだった。

こんにちは、フラつぴーです。今回が初投稿です。

まだまだ未熟者ですが、上手く書けるように頑張りますので、今後とも宜しくお願ひ  
します。

目

S  
A  
O  
編

プロローグ

第1話 『はじまり』

第2話 『第1層攻略会議』

次

16 6 1



# S A O 編

## プロローグ

ある町にとある一軒家があつた。

「ああ、暇だー退屈だー」

少年の名前は風薙瞬

毎日退屈な人生を送っている中学生だ。

「本当に人生つて退屈しかないな」

「お兄ちゃん、明日あれの発売日なんでしょう？  
楽しみじゃないの？」

「あれ？」

「ナーヴギアとソードアートオンライン」

「マジ？」

「マジ」

「よつしやー！ やつと俺の退屈な人生が変わるかもしれないものが手に入るー。綺凛！」

情報ありがとな！」

瞬を「お兄ちゃん」と呼んでいた少女は、瞬の妹の風薙綺凛だ。

年は瞬の一つ下だ。

剣道部に所属していて実力は瞬には劣るが、全国ベスト8に入る大物だ。  
見た目も可愛らしいので男子からの注目的ではあるが兄の瞬はそれをいいように  
見ていない。

瞬は自慢の妹が遠くに行ってしまうことを恐れているほどのシスコンなのだ。

「気にしなくていいよ。いつも退屈にしているお兄ちゃんに喜んで欲しかつただけだか  
ら」

「あれ？ ソードアートオンラインって10000個しか販売していないのか。」

「初回は10000個だけど、後から入荷するらしいよ」

「綺凛の分もかと思つたけど難しいな」

「私の分は気にしなくていいよ」

「いや、折角綺凛がいいことを教えてくれたんだ。綺凛の分も買って来ないと」

「私の分は自分で買うよ。だから、先にお兄ちゃんが使つて感想を教えてくれない？」

「綺凛……わかつたよ。そこまで言うんだつたら先に使わせてもらうよ」

翌日…瞬はナーヴギアとソードアートオンラインを買いに行つた。ギリギリだつたけどなんとか買うことができた。

でも、この日自分の日常が変わつてしまつことに瞬は全く気づかなかつた。

「ついに手に入れたぜーナーヴギアとソードアートオンライン!!」

「よかつたね、お兄ちゃん！」

「ああ！後で感想を言うから楽しみにしとけよ！」

「うん、じゃあ私は遊びに行つてくるね」

「おう、いつてらっしゃい」

バタン…

「さて　ええと使い方は」

「これでよし」

この時の瞬はワクワクしていた。退屈がなくなると思つていたから

「リンクスタート」

目を開けた瞬は現実とは全く違うところにいた。

V R M M O R P G 「ソードアートオンライン」の世界にいた。

「ここがソードアートオンラインの世界！」

そこには見たことのない生き物や植物、建物があつたのだつた。

今瞬はまだまだ素人だつたので何をすればいいのか全くわからなかつた。

「とりあえず街に行つてみるか。何かあるかもしれない」

「へえ、町にはいろんなものがあるんだな」

「そこのお兄さん」

「ん？俺のことか？」

「ハアハア、そ、そう。あの、いきなりこんなこと言うのはどうかと思うけどボクと

パートナー組んでくれない？」

「本当にいきなりだな、いいよ俺もわからないことだらけだから少し不安だつたんだ。」

「ありがとう！ボクはユウキ よろしく！」

「俺はシユン よろしく」

これがシユンとユウキの出会いであった。

# 第1話 《《はじまり》》

「はあああ!!」

ザシユ!!

「やあああ!!」

ザシユ!!

ユウキとパーテイーを組んだシユンは、今フィールドに出ていた。

「やあー戦つた戦つたー」

「中々やるじゃんユウキ」

「いやーボク体を動かすのが大好きだからさー

ついたのしくなつちやつて」

ぐおー!!

だいじょうぶかクライン……

「向こうが騒がしいな」

「ボクたちがさつき倒したフレンジーボアに苦戦してゐみたいだね」

シウンたちが戦つていたモンスター、フレンジーボアはこのアインクラッドの中で一番弱いのでシウンたちは苦戦せずに倒すことができた。

けど、クラインと呼ばれていた人はかなり苦戦しているようだつた。

シウンは何か思い出したようにユウキに聞いた。

「そういえばユウキ。なんで俺にパーティーを組もうつて言つてきたんだ?」

「うーん。そういえばなんでなんだろ。」

「はあ?」

「なんか、この人とパーティー組んだら楽しいと思つたから、声をかけたんだと思う」

「俺、人生が退屈に思つてるやつだぞ」

シュンは人生が退屈に思つてる人間だから、人からは楽しいことは一切無いと思われている。

だから、楽しいと思われたのは初めてだつた。

「そうかなあ。全然そういう風に見えないけど。」

「まあ、その話はもういいか。ん? もうこんな時間か。」

「あ、ほんとだ。楽しいことをしていると時間が過ぎるのがあつという間だね」

「どうする? もう少し狩りを続けるか?」

「ゴメン。ボクそろそろ飯を食べる時間だから一回落ちるよ」

「そうか。俺はもう少し狩りを続けるよ。じゃあまたな」

「うん。ええーとログアウトのやり方は確か設定の…あれ？」

「どうした？」

「ログアウトボタンがないんだよ」

「はあ？ そんなわけないだろ。……本当だ。ない。」

ログアウトボタンがなければログアウトすることができない。  
つまり現実の世界に帰ることができなくなるのだ

この不具合はプレイヤーたちにとつて最悪の状態なのである。

シユンたちがパニックになつていると、突然大鐘が鳴る音が聞こえた。それと同時に

二人の体は光に包まれた。

「うわわわ!? なにこれ!?!」

「ユウキ!? なんだこれ!?!」

そして二人ははじまりの街の広場に強制転移された。

「ユウキ。だいじょうぶか。」

「うん。いきなりどうしたんだろう」

はじまりの街にはシュンとユウキ以外のプレイヤーがいた。

その中には「はやくログアウトさせてくれ」や「何かのイベントか?」などと言つて  
いる人たちがいた。

その時、

「おい!? 上を見ろ!?!」

それにつられて全員上を見た

すると、天上から液体のようなものが流れてきてそれが一つの形になつた。

『プレイヤーの諸君。私の世界へようこそ。』

「どういうことだ？」

『諸君たちのメニュー画面にログアウトボタンがないのはわかるかな。これは不具合ではない。繰り返す、これは不具合ではない。これがソードアートオンライン本来の仕様だ。この世界から出る方法はただ一つ。このゲームをクリアすることだ。後、君たちのヒットポイントが0になつた瞬間、ナーヴギアが一瞬で君たちの脳を破壊する。』

『君達のアイテムストレージにプレゼントを送つた。これでソードアートオンラインのチュートリアルを終了する』

「ふざけるな!?こんな状況でのんきにゲームなんかできるかよ!?  
「帰して!?このあと約束があるの!?

「いやあああ!?」

周りはすでにパニック状態だつた。

その時誰かが、

「皆、落ち着くんだ。さつきGMがプレゼントを送つたと言つていた。一度そのアイテムを見てみよう。」

シウンはすぐにアイテムをみた。その中には『手鏡』と書かれたアイテムが入つていた。

「手鏡?」

すると突然プレイヤーの体が光に包まれた  
目を開けると何の変化もないように見えた。

けど、手鏡を見た瞬間プレイヤー全員が驚いたように叫んだ。

「これは。現実の俺の顔!」

「何だったの今の?」

「!? ユウキ?! だいじょうぶ……か…?」

「ん？ 君は誰？ あれ。 これは現実のボクの顔？」

シユンは絶句していた。 ユウキがいた場所を見れば美少女がいたからだつた。

「君はユウキなのか？」

「？ そうだけど……なんでボク名前知ってるの？ もしかして……君はシユンなの！？」

「ああ。 一体どういうことなんだ？」

「あれじやないかな。 ほら、 初めてナーヴギアをかぶつた時に体のあちこちを触つた  
じやん。 それじやないかな」

「なるほど」

現実の顔のタネはわかつた。 けど、 現状はなにも変わらないままだつた。

「ねえシユン……。 ボクたち、 本当に現実の世界に帰れないのかな。 このまま死んじや  
うのかな」

ユウキは震えていた。自分がいつ死ぬかわからない世界に取り残され、頭の中が混乱していた。

そんなユウキをみて、シュンはユウキを建物の影に連れて行つた。

「ユウキ。俺はこれからこの世界を生き残るために次の街へ行く。  
お前はどうする?」

「ボクは……ボクはシュンに着いて行くよ」

「本当にいいのか。死ぬかもしれないぞ」

「それは街の中でも同じだよ。それだつたらボクはシュンと一緒にいたい」

「ユウキ……わかつた。じやあ今日はもう遅いから明日に出発しよう

「わかつたよ。改めてよろしくね、シュン」

「ああ。よろしくな」

この日からシユンは誓つた  
何としてでもこの世界を生き残ること。  
どんなことがあってもユウキを守り、現実の世界に帰すことを。

## 第2話 《第1層攻略会議》

デスマゲームが始まつて一ヶ月が経ち、2000人ものプレイヤーが死んだ。未だに第1層はクリアされていない。

「ねえシュン。今日は何があるの？」

「今日は第1層攻略会議だ。そろそろ時間だから行くぞ」

「ああ、待つてよ～」

シュンたちプレイヤーが広場で待つていると1人のプレイヤーが出てきた。

「今日は集まってくれてありがとう！俺はディアベル。気持ち的にナイトをやつています」

「このゲームにジョブシステムなんてないだろ？」

ディアベルはコミュニケーション能力をつかって場を和ませた。  
シュンはこの人は人を引っ張る力があると思っていた。

「なんか面白そうな人だね」

「あの人も人を引っ張る力がありそうだな」

「昨日、俺たちのパーティーがボス部屋を発見した。そして昨日新たなガイドブックが配布された。ボスの名は『イルファング・ザ・コボルドロード』。そしてその取り巻きが『ルインコボルドセンチネル』だ。ボスのHPバーが残り一本になつたら武器をタルワールに持ち替えるそうだ」

「やつぱりボス戦はかなり大変そうだね」

ユウキがそう言つているとディアベルは話を再開した。  
けどシュンはずつと一人で何かを考えていた。

(ガイドブックは役に立つていたが、裏面にベータテストの時の情報だと書いていた。  
ならボス戦の時はどこか修正されているかもしれない)

シュンが思つてている通りガイドブックはあくまでベータテストの時の情報で正式

サービスでどこか修正されている可能性がある。シュンはそのことを言おうとした時、

「それじゃあ、四人一組のパーティーを組んでくれ」

「四人一組か。俺とユウキとあと2人か」

「あ、あそこにいる2人はどうかな」

「ちょっとといつてくる」

シュンはそう言つて立ち上がり2人のプレイヤーの所に向かつた。

そのプレイヤーは1人は男でもう1人はフードを被つた女性プレイヤーだつた。

「なあそこのお二人さん。良かつたら俺たちとパーティーを組まないか」

「ああ、いいよ」

「私もいいわ」

「ありがとう。おーいユウキ、パーティを組んでもらつたぞ」

そう言つてシュンはユウキを呼んだ。それを聞いたユウキはすぐにシュンの元へ向かい2人に自己紹介をした。

「こんにちは。ボクはユウキって言うんだ。よろしくね」

「俺はシュンだ。よろしく」

「俺はキリトだ」

「私はアスナ」

「キリトとアスナだね。よろしく」

「みんなパーティーを組んだな、それじゃあ会議を再開 「ちょうどやナイトはん」」

ディアベルが会議を再開しようとした時1人の男性プレイヤーが割り込んできた。

「わいはキバオウつてもんや。会議を再開する前にひとつ言わせてもらうで。こん中に  
ビギナーを見捨てた元ベータテスターがおるはずや。その元ベータテスターにアイテ  
ムを全部ビギナーに渡してもらう。そんぐらいせな命を預けられへん」

「発言いいか」

キバオウが元ベータテストに文句を言つてゐる時体のゴツいプレイヤーが出てきた。

「俺はエギルって言うものだ。あんたもこのガイドブックはもらつてあるだろ」

「それがどうしたんや」

「これを配つていたのは元ベータテストだ。なのに20000人ものプレイヤーが死んだ。それは元ベータテスターのせいじゃないんじゃないか」

エギルの言う通り、ガイドブックをもらつたのに20000人のプレイヤーが死んだということは、その20000人が自殺したか油断して死んだ可能性があるということだ。確かにそれは元ベータテストのせいじゃないと思う。

「それじゃあ、会議を再開する」

夕方……

「はあ～やつと終わつた～疲れたよ～」

「お前途中から寝てたじやねえか」

「ギク！何のことかな／あはは」

「今思いつきりギク！って聞こえたぞ」

「2人は仲がいいんだな」

「そうか？まあデスゲームが始まつてからずつと一緒に行動してたからな」

シユンとユウキはデスゲームが始まつてからずつと一緒に行動していた。別行動などは一度もしていないのであつた。すると突然ユウキは走り出した。シユンたちは急いで追いかけてみると、そこには一緒にパーティを組んだアスナが座っていた。

「ねえお姉さん。そのパンはそのままだとあまりおいしくないでしょ？これを塗つてみて」

そう言つてユウキは小さな瓶を出した。アスナは瓶に手をつけてパンに塗つた。

「これはクリーム？」

「そうだよ、食べてみて」

「……はむ……………はむはむはむ！」

アスナはよっぽど美味しかったのかすごい勢いで食べ終えた。

「よっぽど美味かつたみたいだな」

「あれは確か俺も持っていたはずだ」

「美味しいでしょ。クエストで取つたんだ」

「私は美味しいものを食べるためにここに来たんじゃないわ」

「じゃあ何のために？」

「私が私であるために。あのまま街にいたら私じやなくなるから。私はこの世界に負けないためにここまで来たの」

「早くゲームをクリアしなきやならないのはわかるけど、もう少し気楽にいこうよ。そ  
うじやなきや楽しくならないよ」

「あなたはすごいわね。どうして楽しくしようとできるの？」

「簡単だよ。楽しいと思えばいいんだよ」

「それだけなの？ そうだつたら本当にすごいわ」

「それにボクにはシウンがいるしね」

「気になつたんだけど、2人は付き合つてるの？」

「え!? つつづ付き合つてないよ!!」

「ととにかく!! 早く宿を取りに行こう」

アスナに付き合つているか聞かれたユウキはすぐ動搖していた。

そう言つてユウキは走つて行つた。

「あ、待つてよユウキ」

アスナもユウキの後を追い走つて行つた。

「ユウキは本当に元気なんだな」

「あいつはそういうやつだ」

シュンとキリトもアスナとユウキの後を追い宿を探しに行つたのだった。その後風呂がある宿屋を発見したキリトにアスナが「ここに泊まろう!!」と言いその宿屋に泊まることにしたのであつた。その時のアスナの顔は本当に凄かつたらしい。